

ナンザンスミレについての考察

“対馬にナンザンスミレをみて”

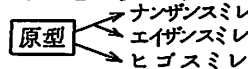
浜 栄 助

E. Hama: A study of *Viola chaerophylloides* W. Becker, "By collecting those of Tsushima Island"

ナンザンスミレ群に関する従来の見解

ヒゴスミレ *Viola chaerophylloides* (Regel) W. Becker f. *sieboldiana* (Maxim.) F. Maekawa et Hashimoto とエイザンスミレ *V. eizanensis* Makino、それに日本における存在が問題となっている朝鮮を分布の主体とするナンザンスミレ *V. chaerophylloides* (Regel) W. Becker の三者の類別とその分類上の取り扱いについては古くから多くの研究者の間に諸説があり、その学名も独立した種名でとりあつかったり、*V. pinnata*, *V. dissecta*, *V. albida* などを母種としてそれらの変種または品種にするなど色々な位置に格付けされたりして今日尚共通の見解が持たれていない。これら三者はその形質が互いに似ているだけに、たとえばエイザンスミレとヒゴスミレについてさえも実際の野外においてはそれらのどちらとも判別のつかない個体または個体群に接することがしばしばある。筆者も、ヒゴスミレの生育地（付近にエイザンスミレは見られない）に10数株の両者の中間型を見出したり、逆にエイザンスミレの生育地に中間型を見出したりしてその種別を決めかねたことがあった。また比較的近距离にある両者の生育地の一方にそれらの雑種とも思われる株を見つけたこともある。1965年、望月昇が交配によって作り出したエイザンスミレとヒゴスミレの雑種はまさに中間型であり、これらの問題を解く一つの重要な鍵になるものであるが、興味深いことは、この雑種は他の一般雑種と異り、誠によく結実する稔性を示すことで、この両種がかなり濃い類縁を示すものとして注目しなくてはならない。

島津昭は1954年、諏訪産のヒゴスミレでエイザンスミレに近い型をとりあげてF型と名づけ、これを仲介として両者の各タイプの親疎関係にふれているが、その後の筆者への私信でこのF型はナンザンスミレとしてもよく、日本独得のエイザンスミレは九州あたりの山の高所でF型即ち大陸系のナンザンスミレ型から分かれたのではなかろうかとも推察していることを伝えてきた。竹内亮によると実際に九州の山地にはヒゴスミレともエイザンスミレとも判断しかねるナンザンスミレ型が育成しているとのことである。

また1962年、伊藤栄子もこの問題にふれ、柱頭（花柱上部）、子房、種子の形などから、上州鹿沢産のものをナンザンスミレとし、日本にナンザンスミレの存在を認めた上で **原型**  ナンザンスミレ、エイザンスミレ、ヒゴスミレの考察をし、その原型は南満州、北朝鮮方面の *V. dissecta* であると想定した。

併しながら東京大学、科学博物館や竹内亮などの所蔵の、朝鮮や満州のナンザンスミレの標本を調べてみると、ナンザンスミレにはやはりナンザンスミレ独得の形質があり、日本各地に存在するナンザンスミレ的中間型とは異なることが判断でき、筆者は橋本保と同じく日本にはナンザンスミレは生育しないとの見解をとっていた。

対馬にナンザンスミレを見る

1968年、古瀬義から長崎県対馬御岳産のエイザンスミレ?とした標本をうけ、疑問を感じたので更にその後同氏栽培中の生品と、対馬の浦田明夫からの別の場所の複葉性の生品を入手して観察を続けた。その結果、これらは何れも外形、花などからヒゴスミレでもエイザンスミレでもなく、明らかにナンザンスミレであると判断できたので、その実態を見るために、1971年4月28日から3日間にわたり、栃木の神山隆之と同島を訪れ、白岳及び御岳を中心にスミレ属の調査にあたった。日数は短かったが花時のもの、花後の夏葉のものなどかなり多数にわたって目的の複葉性のスミレを調べることができたが、2人の調査範囲ではこれらはいずれも朝鮮系のナンザンスミレと判断してよいものばかりで、本土のような典型的なエイザンスミレやヒゴスミレの群は遂に見当らなかった。チョウセンヤマツツジ、チョウセンカラスウリ、チョウセンキスゲなどのように、本土にない大陸系植物がかなり多く入っている対馬であってみれば、分布上からみてもナンザンスミレの生育はその可能性のある訳で、既に済州島でも知られている。従来調査記録されている対馬の植物をみると、白岳や御



写真 対馬御岳頂上附近のナンザンスミレ (S.46.4.30)

岳のものはエイザンスミレまたはヒゴスミレとして報告されているが、これらはナンザンスミレを誤認したものと考えられる。

但し、御岳頂上付近のナンザンスミレの群落の中に、1株だけ、浜、神山両者がみて典型的なエイザンスミレの花と葉をもつ個体を見出し、その後その生品を浜が栽培しているが、この株だけはきょ歯こそエイザンスミレより深い、夏時にはエイザンスミレ型と同じ

3小葉の葉が出るので興味深く観察している。エイザンスミレとヒゴスミレを橋渡しすると考えられるナンザンスミレの群落が対馬にあり、その群落の中にわずかながらエイザンスミレの型があるということは、或は島津の想定するようにナンザンスミレからエイザンスミレが分かれたという考え方を、この対馬の地にあてはめてもよいかも知れないという憶測にうたれるのである。

朝鮮系のナンザンスミレの花色については、白色でしん弁に紫条があるが、しばしば上弁の背面に紫斑が出るという牧野の記載がある。対馬のもの花色は、白色も多いが、かすれたような紅紫色斑が背面または両面にあるもの、エイザンスミレ状に近い花弁全体が淡紅紫色をしているものなど変化がある。

ナンザンスミレ、ヒゴスミレ、エイザンスミレ三者の比較

次に対馬のものを主体としたナンザンスミレと、ヒゴスミレ及びエイザンスミレの三者の、できるだけ差違を示すような特徴を表記してみる。

複葉性スミレ3種の比較

		ヒゴスミレ	ナンザンスミレ	エイザンスミレ
葉	花 時	3全裂し、側裂片が更に全裂し5裂状、拡げると正五角形状、各裂片は細い線形〜広線形。	ヒゴスミレのように5裂状、拡げると正五角形状。裂片はヒゴスミレより広く、エイザンスミレ状に近い。	3全裂し、各裂片は更に不規則に割れ、鳥跡状で、拡げてもナンザンスミレ程、正五角形状にならない。裂片はナンザンスミレよりやや広い。
	花 後	外見5裂状で、裂片は細かいものから単純な巾の広い5小葉のものまで変化がある。エイザンスミレのような小葉は出ない。	外見5裂状で、裂片は次第に巾広くなり、単純な5小葉のものへと移行する。エイザンスミレのような小葉は通常出ない。	裂片が巾の広い外見5裂状のものから、単純な卵状披針形をした3小葉のものへと移行するのが普通である。
	芽生え	子葉に続く第1葉は5裂状の小葉よりなる。	第1葉はヒゴスミレ状に近い中間型	第1葉は3小葉よりなる。
花	花冠形	各弁がまとまって咲き、花弁のふちは波状をしていない。満開時には上弁が特にそりかえる。	中 間 型	花はややひろがつて咲き、花弁のふちが波状で、通常豪華な感をあたえる。
	大きさ	花冠径1.5cm内外、花弁は長さ1.1〜1.5cm、巾0.5〜1cm。	花冠径1.5〜2cm、花弁は長さ1.2〜1.5cm、巾0.6〜1cm。	花冠径2cm内外、花弁は長さ1.5〜2cm、巾0.8〜1cm。
	色	白色、まれにいくらか淡紅紫色	白色が多いが、かすったような淡紅紫色、全体淡紅紫色もある	淡紅紫色が多いが、紅紫色、まれに白色もある。
	下弁の距	長さ4〜6mm、余り太くない。	長さ4〜7mm余り太くなく、ヒゴスミレ状か中間型。	長さ6〜7mm、太い円筒形。
	果 実	長さ1〜1.3cm、淡緑色、時に紅紫斑点あり全体紅褐色。	長さ1〜1.4cm、淡緑色か、紅褐色。	長さ1.2〜1.5cm、紅褐色時に緑色。
生 育 環 境		日当たりと水はけのよい比較的乾燥した草地、路傍、まばらな林内に多い。	どちらかというエイザンスミレのように樹陰でやや水分の多い傾斜地に多いが、林縁や疎林の日の当るやや乾いた所にもある。	日の当たらない山地樹陰の小川沿いや路傍などで、特に土砂が次第にくずれる傾斜地を好む。
備 考		その他の例えば葉の色、無毛から両面有毛までである葉の毛の状態、側弁有毛のこと、花柱上部が凸頭で丸味をおびていること、種子が長さ2mm位で、黒褐色のことなどの特徴は三者ほとんど共通で、とりあげて比較する程のことはない。鉢栽培はナンザンスミレがもっとも容易である。		

考 察

上記の表でみるように、ナンザンスミレを語句の上でヒゴスミレやエイザンスミレと区別することはかなり困難であるが、実際に生育地でその群落を見ると、非科学的のようではあるが感覚の上では明確な違いを感じとることができ、特に果時においては区別が付きやすい。但しこれはそれぞれの典型品についていえることで、感覚の上からも区別のつきにくいものもしばしばある。

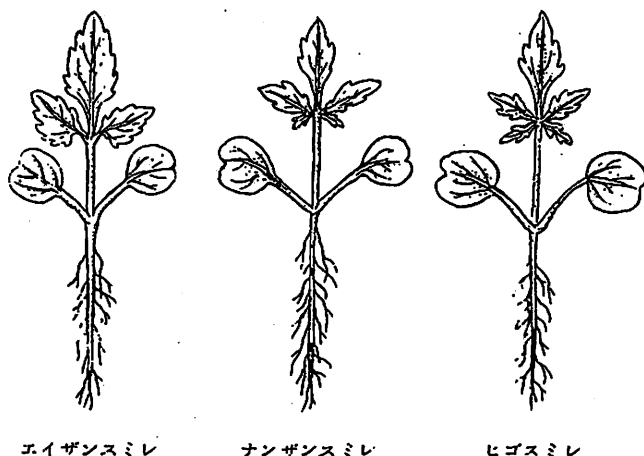
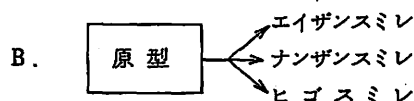
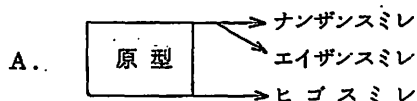


図. スミレ三者の本葉第一葉の比較

以上、対馬のナンザンスミレを主体に色々な観点から考えると、伊藤栄子の推論Aは妥当性のある



一説といえようし、またBのような形であってもよいのではないと思われる。但しその原型として *V. dissecta* をとることは、既に中井や橋本がふれているように否定的な見解が強いが、朝鮮以北の大陸のスミレを生品によって調査したことのない筆者には推測不能であり、今後の課題としておきたい。何れにせよ、もしこのように同一原型から出たものとしても長い年月を経たであろう現在においては、それぞれの典型品を三者とも別々の種としてとりあつかってもよいであろうし、エイザンスミレやヒゴスミレをナンザンスミレの Var. また F. に位置付けても間違いではないと思われる。また、同一原型から出たものとする、それら三者の分化してきた接点に位するものはそれこそ何れとも区別し難いものであり、現在でも二次的、三次的にそのようなものが出現することも考えられるので、しばしば野外においてその判別で研究者を悩ませることのあるのも無理からぬことといえるのではなかろうか。以上筆者の見解をのべたが、朝鮮、中国のナンザンスミレ群の詳細な調査や、細胞遺伝学的な研究をもふくめて、この問題が今後さらに追求されていくことを望みたい。

この研究をすすめるに当たり、直接御厄介になり御協力いただいた古瀬義、浦田明夫、神山隆之の諸氏のほか、御指導いただいた竹内亮先生に厚く感謝の意を表したい。

主 要 参 考 文 献

中 井 猛 之 進 (1922) 植物学雑誌 36: 85~86

- 大井次三郎(1953) 日本植物誌 787
 原 寛(1954) 日本種子植物集覧 3:195~196、199
 島津 昭(1954) 採集と飼育 16:19~24
 竹内 亮(1954) 中国東北部地方産蕈菜属植物の分類、生態及分布誌要 16~17
 伊藤 栄子(1962) 国立科学博物館研究報告 6:194~203
 橋本 保(1967) 日本のスミレ 104~107

帰化植物の調査から 霧ヶ峯の現状を訴える

浅 川 富 雄

T. Asakawa: Nature destruction of the Kirigamine Plateau indicated by the naturalized plants

帰化植物の侵入度はその地の自然がどれほど荒されているかの指標になるとされている。この立場から霧ヶ峯の現状を診断しようとしたのがこの調査である。霧ヶ峯は広大な面積をもつので、その全域を踏査することは容易でないが、2ケ年間(昭45、46)回を重ねた観察をまとめた結果により、観光地となった現在の霧ヶ峯について、自然保護の立場から考察したい。

帰化植物とは、広い意味では、いつの時代にか、何らかの方法で日本に運ばれてきて野生になってしまった植物のことであるが、ここでは渡来の時期が徳川末期以後でおよそ見当がついている狭い意味のものに限ることとする。長野県全部にわたる調査は今後の課題であるが、松本の周囲中信地区に分布する帰化植物は今年は、130種余りであり、諏訪盆地では、とくに諏訪湖の周縁から茅野市までと岡谷市天龍筋の調査で、確認採集したもの約70種であって、全部では100種を越しているに違いない。しかしこれは当地方のような早くから文化が開け交通の発達した地域では驚く数ではない。

霧ヶ峯は、標高1300m以上、2000mに及ぶ高原である。春のあけぼのはまず真っ白いズミの花、初夏はレンゲツツジで全野が萌え、夏はニッコウキスゲやヨツバヒヨドリ、マツムシソウとそれとそ花の海である。霧ヶ峯は決して一朝一夕にできた自然ではない。こうした自然に外来の植物は無縁のはずである。しかし現実はどうであろうか。

ジャコウ原農場は平地と変らない

ここは霧ヶ峯の南部熔岩台地の端で約1kmの面積をもち、標高1300m、諏訪市街から凡そ